

国際会議等参加旅費補助金報告書

2019 年 10 月 1 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 慶應義塾大学大学院社会学研究科
心理学専攻 修士課程 2 年
氏名 品川 和志



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	59 th SPR Annual meeting (Society for Psychophysiological Research) SPR 第 59 回 年次大会
公式ホームページ URL	https://sprweb.org/page/2019_Annual_Meeting
開 催 期 間	2019 年 9 月 25 日 ～ 2019 年 9 月 29 日
旅 行 期 間	2019 年 9 月 24 日 ～ 2019 年 9 月 29 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Hyatt Regency Washington on Capitol Hill, NW, Washington DC, USA アメリカ合衆国 ワシントン DC 北西地区 ハイアットリージェンシー
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	慶應義塾大学社会学研究科心理学専攻 品川和志, 辻幸樹, 田仲裕登, 小高真奈 慶應義塾大学文学部 伊藤友一, 寺澤悠理, 梅田聡 慶應大学先導研究センター 柴田みどり
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Change of Neural Activity Toward Awareness of Mind Wandering: An ERP Study マインドワンダリングの気づきに随伴する神経活動の変化 ー事象関連電を用いた検討ー
補 助 金 額	68,000 円 (内訳 航空券の代金として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、「59th SPR Annual Meeting (SPR 第 59 回 年次大会)」の参加にあたり、国際会議等参加旅費補助金への申請を採択していただき、誠にありがとうございました。

以下に、当該学会の概要、自身の発表の成果、及びその他の活動内容についてご報告致します。

【大会概要】

本大会は、Society for Psychophysiological Research (SPR) が毎年開催している、生理心理学分野の国際的な大会である。期間中は多くの symposium や workshop, poster session が行われ、世界各国から参加者が集まった。参加者は生理心理学領域の教授、ポスドクや博士、修士課程の学生に加えて、臨床領域からも参加者が集っていた。

【報告者の発表成果】

報告者は、現地時間での 9 月 25 日の 19:00~21:00 の時間帯に行われたポスターセッション 1 においてポスター発表を行った。発表題目は「Change of Neural Activity Toward Awareness of Mind Wandering: An ERP Study (マインドワンダリングの気づきに随伴する神経活動の変化—事象関連電を用いた検討—)」であった。以下に発表内容を示す。

現在行っている課題や思考以外のことについて考えてしまうマインドワンダリング中(以下 MW)は課題への注意が減少するため適切に抑制される必要がある。抑制の手法として MW が発生した後できるだけ早く気づくことが重要であると指摘されている。気づきのメカニズムの一つとして外的な刺激により MW に集中している状態が遮られ、気づきに至ることが考えられている。集中していても MW が自然と起きてしまうことからわかる通り、注意は一つの事象に対し維持し続けることはできず、常に遷移し続けていることがわかる。このことから上記のような気づきのメカニズムは、外的刺激がない場合であっても、自発的な注意の遷移によって MW が遮られ、気づきに至ることが考えられる。報告者はこの仮説検証のために実験を行った。気づきの前の課題に対する注意配分量を脳波指標(P300)により測定し、統計モデル(状態空間モデル)を用いて、注意の遷移の中に変化点があるかを調べた。結果として、気づきの約 4 秒前程に課題への注意配分量が増加していることがわかった。この結果は、先行研究において MW への注意配分が割かれていると考えられていた時間帯に注意が再び課題に向き始めていることを示すものであり、MW の気づきには注意の自発的な変化に関わるという仮説を支持するものであったと考えられる。

発表中は、MW が関連すると考えられている well-being や、本研究で用いられたモデルアプローチだけでなく、領域全体の広い話題についても議論を行った。手法や MW の定義、これからの研究の方針についての議論を通じ、有益なアドバイスを多数頂いた。

【大会参加状況と活動内容】

報告者は大会全日程に出席した。発表内容は生理心理学が関連する領域全般であったため、「計算論、認知心理学、臨床心理学」を中心にシンポジウムやポスターを聴講した。中でも Tor Wager の招待講演では、昨今の心理学領域で大きな関心を集めている機械学習を用いて、操作を行ったときの脳活動から、脳活動が起きたときにどのような結果が生まれるのかの推定についての考察を行っており、非常に興味深く、新しい技術と発想の融和を感じた。

○補助を頂いた 68,000 円につきましては、航空券費用として使用させて頂きました。本学会参加により、様々な研究室との繋がりを作るだけでなく、国際的なコミュニケーション能力、知見の拡充、建設的な議論を行う能力を培うことができました。この度は誠にありがとうございました。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2019 年 7 月 24 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 大阪大学大学院人間科学研究科
修士課程 2 年
氏 名 山縣 芽生



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The 13th Biennial Asian Association of Social Psychology アジア社会心理学会第 13 回大会
公式ホームページ URL	https://taipei.asiansocialpsych.org/?src=nav
開 催 期 間	2019 年 7 月 11 日 ～ 2019 年 7 月 13 日
旅 行 期 間	2019 年 7 月 10 日 ～ 2019 年 7 月 14 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Taiwan, Taipei, Academia Sinica (台湾・台北・中央研究院)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	山縣芽生・綿村英一郎・寺口 司 (大阪大学大学院人間科学研究科)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	The Replication of Moral Foundations Questionnaire in Japan (日本における道徳基盤理論の再現性研究)
補 助 金 額	38,000 円 (内訳 航空運賃、宿泊費の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、アジア社会心理学会第13回大会（AASP2019）の参加にあたり、貴学会の国際会議等参加旅費補助金のご支援を頂いたことに、関係者の皆様へ厚く御礼申し上げます。以下、当該学会の概要、学会の様子、発表・参加による自身の成果についてご報告致します。

【学会概要】

申請者が参加したAASPは2年に1度開催される、アジア最大級の社会心理学に関する国際学会である。今年度は2019年7月11日から7月13日の3日間開催され、学会会場は台北市（台湾）の中央研究院であった。600名以上が参加し、シンポジウムやポスター発表を通して盛んな議論が行われた。

【学会の様子】

3日間のすべての日程に参加したところ、アジア社会心理学会という学会名からもわかるように、アジア文化という変数に着目した研究が多かった。申請者自身も文化による影響に関心があることから、“Culture”、“Cultural Influence”、“Cross Cultures”といったトピックを中心に聴講した。特に、印象的であったセッションはHeine, S.氏の招待講演であった。近年の心理学において問題視されているサンプリングバイアスに着目し、特にWEIRD文化の人々を対象とした研究の現状、さらにはその解決策について議論が行われた。具体的な解決策としては、研究者同士で国際的な関係性を築くことが挙げられた。これにより、多様なサンプルを収集することが可能となり、WEIRD研究の過多を防ぐことができるとしている。また、氏の主張と一致してAASPでは国際交流を促すサマースクールを開催しており、研究者同士をつなぐファシリテーターとして積極的な活動を行っている。このようにして、学会全体でも研究の国際化を図ることで1つ1つの研究の障壁が解消され、心理学全体の学術的発展にもつながることが期待される。

【発表・参加による成果】

1. 発表による成果

申請者は、大会2日目（12日）に“The Replication of Moral Foundations Questionnaire in Japan”という題目で1時間（12時10分～13時10分）のポスター発表を行った。このセッションは昼食休憩と並行して設けられていたため、聴衆の少なさを予想していたものの、実際は絶え間なく多くの人と議論を行うことができた。申請者の報告内容は、道徳研究の主要理論である道徳基盤理論の追試、さらには文化の影響も考慮した代替モデルの提案についてであった。道徳基盤理論という有名な理論を扱っていたことにより、多くの人が事前知識と関心を持って足を運んできた印象があった。その中には、申請者と同様の内容（先行研究の追試）を自国で行った香港人と台湾人の研究者がおり、彼らとはより専門的な内容で議論を行うことができた。代替モデルの考察についても好意的な態度を得られたことから、これからの道徳基盤理論研究に新たな議論を提供できると考える。

2. 参加による成果

文化という申請者の関心に合致した当該学会に参加したことで、3日間で多様な文化比較研究に触れることができた。中には、東アジアとアメリカでは異なる研究結果が得られると指摘する研究もあり、自身の専門分野においても文化性に着目した検討の必要性を実感した。こういった経験は実際に当該学会へ足を運んだからこそ得られ、参加した意義は大いにあったと考える。今後も国際学会に参加していくべく、このような経験を活かして研究活動に努めていきたいと考えている。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2019 年 8 月 19 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 早稲田大学大学院 文学研究科
人文科学専攻 博士課程
氏 名 吉野 伸哉



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The Third World Conference on Personality 第 3 回 パーソナリティ世界学会
公式ホームページ URL	http://www.perpsyconference.com/
開 催 期 間	2019 年 4 月 3 日 ～ 2019 年 4 月 6 日
旅 行 期 間	2019 年 4 月 2 日 ～ 2019 年 4 月 6 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Vietnam, Hanoi, Pan Pacific Hanoi 国：ベトナム，都市：ハノイ，会場：パン パシフィック ハノイ
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	吉野 伸哉（早稲田大学大学院 文学研究科） 小塩 真司（早稲田大学 文学学術院）
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Tolerance of immigrants in Japan: Big Five personality traits and population ratio of foreigners (日本人の移民に対する寛容性 ーパーソナリティ特性と居住地域の外国人人口割合に着目した検討ー)
補 助 金 額	38,000 円 (内訳 往復航空券代 61,780 円，宿泊代 42,325 円の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー，および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

このたびベトナム・ハノイにておこなわれた The Third World Conference on Personality への参りにあたり、国際会議等参加旅費補助金を賜りました。日本心理学会のみなさまに心より感謝申し上げます。

以下に概要と成果を報告いたします。

学会概要

当該大会は 2019 年 4 月 3 日～6 日におこなわれた国際学会である。今回で 3 回目の比較的新しい大会であるが、世界有数のパーソナリティ心理学者が集まっており、シンポジウムやポスター発表では刺激的な議論や意見の交換がおこなわれた。報告者がおこなったポスター発表は電子パネルが使用され、発表者は 5 台ある電子パネルに自身のポスターを交互に掲示する形式であった。

発表内容

報告者は、外国人が多い地域において、Big Five パーソナリティ特性と外国人居住者への寛容性の関連が見られるかを検討した。日本は「移民大国」であり、今後も増え続けると考えられることから、移民に対する日本人の反応を検討することは意義のあることであると考えられる。本研究では既存データの二次分析をおこない検証した。分析の結果、外国人人口割合と神経症傾向において交互作用が有意傾向であった。単純傾斜分析をおこなったところ、外国人が多い地域において神経症傾向と寛容性が負の関連を示した。外国人が多い地域に住む神経症傾向の高い人々は、近隣の異質な他者に対する脅威を感じやすく、寛容性が低い可能性を考察として論じた。

参加によって得られた成果

報告者の発表内容は、近年断続的に増加している移民・外国人居住者に対する心理的な反応を検証したものであった。学会がおこなわれたベトナムからは毎年多くの労働者が日本を訪れ、就業している。ベトナムで本研究のような発表をおこなえたことは、報告者にとって非常に印象に残ることであり、この研究領域に対する意欲をより高めることになった。

報告者は通算 2 度目の国際学会への参加であった。前回は言語の壁と緊張から、思うような発表ができなかった。本大会では前回の反省を踏まえ、言語の対策をしっかりと立てたことにより、充実した発表となった。報告者の研究分野の学会であったこともあり、多くの海外研究者から有益な意見やアドバイスをいただくことができた。

また本大会では多くの研究発表を聴講した。先述のように世界有数のパーソナリティ心理学者が集結していたため、最先端の研究知見を知ることができた。新しい理論の提唱、方法論の提案、斬新な研究視点を学ぶことは、学会参加の醍醐味である。これらの体験は報告者の今後の研究の参考になったとともに、研究に対するモチベーションの向上にも大きく貢献した。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2019 年 7 月 29 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 広島大学教育学研究科教育学習科学専攻

氏 名 覃宝妮



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The 13 th Biennial Association of Social Psychology Conference (2019) AASP 第 13 回 年次大会
公式ホームページ URL	https://taipei.asiansocialpsych.org
開 催 期 間	2019 年 7 月 11 日 ～ 2019 年 7 月 13 日
旅 行 期 間	2019 年 7 月 10 日 ～ 2019 年 7 月 14 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Taiwan・Taipei・Academia sinica 台湾・台北・中央研究院
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	覃宝妮・森永康子 (広島大学教育学研究科)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Women's negative attitudes toward female subgroup: the interaction of female subgroup identification and gender role attitudes
補 助 金 額	38,000 円 (内訳 往復航空運賃の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー，および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、The 13th Biennial Association of Social Psychology Conference (2019)に参加するにあたり、日本心理学会国際会議等参加旅費補助金を賜りまして、日本心理学会と関係者の皆様に感謝申し上げます。以下、AASP についてご報告いたします。

【学会概要】

The 13th Biennial Association of Social Psychology Conference は台湾の台北市で3日間に渡って開催されました。今回の国際会議のテーマは、「文化志向的な心理学の統合への未来：進歩と成果」であり、アジア社会心理学における3つの主な分野：「異文化間心理学」、「文化心理学」と「住民心理学」を巡る議論が行われました。アジア社会心理学のこの20年間の研究成果に基づき、13th AASP では、理論的な展開と経験的な展開について深く考察し、将来の方向性を統合するために、異なる心理学的な観点に革新的な統合をもたらすことが望まれています。台湾で開催されていることで、従来のヨーロッパ圏中心の研究雰囲気と異なり、アジア圏で注目されているテーマと研究視点をアジア圏の発表者から多く聞きました。

【成果】

1. ポスター発表

報告者は、7月11日の12:00～13:00にポスター発表を行いました。発表テーマは「Women's negative attitudes toward female subgroup: the interaction of female subgroup identification and gender role attitudes (女性から女性サブグループへのネガティブな態度：女性サブグループ・アイデンティティと性役割観の交互作用からの検討)」でした。

本発表の内容は、近年日本における女性のサブグループ化に注目しながら、女性から女性へのネガティブな態度についての検討です。この研究では、働く女性と主婦を対象にし、インターネットでの質問調査により、サブグループ化された女性（働く女性 vs 主婦）は、他方の女性サブグループ（主婦 vs 働く女性）を外集団に見なし、所属されている女性サブグループのポジティブな弁別性（positive distinctiveness）を維持するため、所属女性サブグループの社会的価値を高め、他方の女性サブグループの社会的価値を低めることに介して、他方の女性サブグループにネガティブな態度を示すことが検証されました。

発表当時、多くの参加者が足を止めてくれました。質問者たちの関心は、「研究デザイン」「女性サブグループの定義」「社会的価値を媒介する理由」に集中しました。事前に準備した研究デザインの説明図などの資料を示してお答えしました。英語で自分の研究を紹介し、アジア各国からの研究者の質問に英語で答えることができました。更に、他国の研究者から、「女性サブグループ間のネガティブな態度に関する他の可能な影響要因」「今後の研究に対する注意すべき点」という自分の研究に非常に重要なアドバイスをいただくことができ、非常に有意義な経験となりました。

2. 他のプログラムの参加

3日間を通して様々な講演を聴講し、アジアにおける様々な国の社会心理学の研究動向などについて見識を深めることができました。特に、自身の研究と趣味に関連のある、性差別やLGBTQに関連する内容を中心に、講演に参加して他の研究者とディスカッションすることで、他国の女性・LGBTQ現状とそこの研究者が抱いている理想と注目している問題についての理解を深めました。また、社会における女性とLGBTQへの偏見を解消するため、社会心理学の研究は重要な立ち位置にあると感じました。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2019 年 10 月 2 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 同志社大学大学院脳科学研究科
一貫制博士課程 4 年

氏 名 阪口幸駿



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The 10th International Brain Research Organization World Congress of Neuroscience (国際脳研究機構第 10 回世界大会)
公式ホームページ URL	http://www.ibro2019.org/index.php
開 催 期 間	2019 年 9 月 21 日 ～ 2019 年 9 月 25 日
旅 行 期 間	2019 年 9 月 21 日 ～ 2019 年 9 月 25 日 (変更有)
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Daegu Convention & Exhibition Center, Daegu, Korea (韓国・大邱・大邱展示コンベンションセンター)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	阪口幸駿 (同志社大学大学院脳科学研究科) 櫻井芳雄 (同志社大学大学院脳科学研究科)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Functional left/right hippocampal asymmetry and sprit-brain in forming short/long-term memory (短期/長期記憶形成時における機能的左右海馬非対称性と分離脳)
補 助 金 額	38000 円 (内訳 参加費、宿泊費および航空券代の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー，および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、“The 10th International Brain Research Organization World Congress of Neuroscience（国際脳研究機構第10回世界大会）”への参加にあたり、国際会議等参加旅費補助金への申請を採択していただき、誠にありがとうございました。以下に、当該大会の概要、発表の内容、及び発表の成果についてご報告いたします。

【大会の概要】

本大会は、International Brain Research Organization (IBRO)が4年に一度開催している、国際的な脳神経科学および脳認知科学の大会である。今大会は韓国大邱市において、Korean Brain Research Institute (KBRI) と Korean Society for Brain and Neural Science (KSBNS)が中心となって開催された。期間中は、11件のInvited Lectureや40件のSymposium（計約200件の発表）、1000件近くのPoster発表などが行われ、5日間の合計で4385人の参加者が集った。参加者のバックグラウンドは様々で、認知機能に関わる遺伝子や分子などの基礎研究から、げっ歯類やサル、鳥などを用いた動物の行動神経科学、認知課題中のヒト脳の活動状態の解析、さらにこれらの知見を利用した実社会への応用など、脳をキーワードとして心理学分野と神経科学、生物学、情報科学、医学などが融合した学際的な大会であった。

【発表の内容】

本発表では、「Functional left/right hippocampal asymmetry and split-brain in forming short/long-term memory（短期/長期記憶形成時における機能的左右海馬非対称性と分離脳）」というタイトルで、ラット海馬の記憶形成に対する左右半球機能差の実態と左右半球間相互作用の関与の可能性について報告した。ヒトの言語野が左脳に偏るように、ヒトの脳機能の左右差はこれまでに多数報告されているが、動物にもこのような左右差があるのかははっきりしていない。しかし昆虫や爬虫類などの行動試験では記憶機能の左右差の存在が仄めかされている。そこで我々は、記憶を制御するラット海馬の一側的な損傷実験から、短期記憶および長期記憶形成に対する貢献の左右非対称性を見出し、さらに左右海馬を繋ぐ海馬交連線維の分離脳様の離断が長期記憶ではなく短期記憶の形成を阻害することを確認した。これらの結果から、記憶形式の違いに依存して左右海馬の関与や左右海馬間の連携が変化し、これにより動物が周囲の環境に合わせた適応行動を表出できることが示唆される。

【発表の成果】

発表責任時間（9月23日12:40～14:40）には10人程度の参加者が訪れ、発表者が研究内容を説明した後、その中の数人とは解剖学的、機能的、進化学的なディスカッションを行った。聴衆は総じて、ラット脳の機能的左右非対称性の存在に驚いていたようで、非常に意義のある報告となったと思われる。発表者にとっても、聴衆からの左右差に関する経験談（「論文にはしていないが、ある実験を行った際に左右差が観察されて実は疑問に思っていた」など）をいくつか得ることができ、国際学会ならではの情報量の多さで大変有意義であった。

【その他】

論文投稿に関するシンポジウムでは、トップジャーナルの編集者達（Science, Cell, Nature Communications）が実際に審査プロセスの裏側や編集者側の事情などを赤裸々に語っており、日本国内の学会では絶対に得られないであろう情報を多数手に入れることができ、国際学会への参加の重要性を痛感した。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2019 年 7 月 15 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 お茶の水女子大学大学院・博士後期課程

氏 名 中村 香理



□

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	Society for the Exploration of Psychotherapy Integration XXXV Annual Meeting (心理療法統合を考える会第 35 回年次大会)
公式ホームページ URL	https://www.sepiweb.org/
開 催 期 間	2019 年 6 月 6 日 ～ 2019 年 6 月 8 日
旅 行 期 間	2019 年 6 月 5 日 ～ 2019 年 6 月 11 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Portugal・Lisbon・University of Lisbon (ポルトガル・リスボン・リスボン大学)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	中村 香理 (お茶の水女子大学大学院) 岩壁 茂 (お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	From in-session corrective emotional experiences to outside-session changes: A theory-building case study using in-session process data and e-mail exchanges (面接内の修正感情体験から面接外の変化へ: 面接内のプロセスデータと E メールやりとりを用いた理論構築型事例研究)
補 助 金 額	68,000 円 (内訳 航空運賃の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、Society for the Exploration of Psychotherapy Integration XXXV Annual Meeting への参加にあたり、日本心理学会より国際会議等参加旅費補助金をいただきましたことを、心より感謝申し上げます。学会での活動、報告者の研究発表、参加により得られた成果について報告させていただきます。

【学会での活動】

報告者は、「From in-session corrective emotional experiences to outside-session changes: A theory-building case study using in-session process data and e-mail exchanges」という演題で口頭発表を行うため、2019年6月6日から8日にかけて、ポルトガルのリスボンで開催された Society for the Exploration of Psychotherapy Integration XXXV Annual Meeting に参加した。本学会は、異なる理論的オリエンテーションをもつ臨床家・研究者同士の対話を促進し、臨床実践と研究方法を発展させることを目指すものである。初日午前は Pre-Conference Workshop が開催され、その後3日間に渡って Panel, Mini-Workshop, Structured Discussion, Poster Session などが行われた。報告者は2日目の7日に発表を行った。

【報告者の研究発表】

報告者は、心理療法のアプローチをこえて共通の変容メカニズムの一つとされる「修正感情体験」に焦点を当てた研究について口頭発表を行った。修正感情体験とは、クライアントの過去の痛みを伴う感情体験がセラピストとの好ましい治療関係の中で変容されるプロセスをさす。心理面接の中で実際にどのように修正感情体験が起こるのか、そしてそれがどのようにクライアントの日常生活に変化をもたらすのか、ということが重要なテーマである。そこで、本学会では、修正感情体験がクライアントの変容に重要な役割を果たした1事例を題材に、クライアントの視点から面接内外の体験を検討し、修正感情体験とその般化について理解を深めることを目的とした研究について発表した。発表では、問題と目的、方法、結果の概要を口頭で説明した後、修正感情体験が起こった実際の面接場面のビデオと、その後に起こった日常生活における変化に関するクライアントの記述を、英語の字幕をつけて提示した。最後に考察について口頭で説明し、指定討論者や聴衆からコメントを受けた。指定討論者や聴衆からは、修正感情体験をもたらすセラピストの態度や介入に関するコメントがあった。

【参加により得られた成果】

上記の研究発表において、心理療法のアプローチや文化をこえて修正感情体験に重要な要素について議論することができた。また、他の臨床家・研究者の発表を聴くことによって、心理療法研究や臨床家の訓練に関する最新のトピックも知ることができた。今後の、臨床家・研究者としての自分自身の成長、また日本の臨床心理学の発展に活かしていきたいと感じた。

最後に、今回の研究発表についてご指導いただきました、お茶の水女子大学岩壁茂准教授に心より感謝申し上げます。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2019 年 7 月 3 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 東京外国語大学大学院総合国際学研究科
世界言語社会専攻博士後期課程 1 年

氏 名 馬場 正太郎



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The 7th International Self-Determination Theory Conference 2019 2019 年第 7 回自己決定理論国際学会
公式ホームページ URL	https://sdt2019.org/
開 催 期 間	2019 年 5 月 21 日 ～ 2019 年 5 月 24 日
旅 行 期 間	2019 年 5 月 19 日 ～ 2019 年 5 月 27 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Hotel Zuiderduin Egmond aan Zee, Egmond aan Zee, The Netherlands オランダ, エグモント・アーン・ゼー, ザイダードゥイン・ホテル
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	馬場正太郎 (東京外国語大学大学院総合国際学研究科)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Is Intrinsic Regulation the Most Ideal for Promoting Foreign Language Learning? 内的調整は外国語学習において最も理想的と言えるのか?
補 助 金 額	68,000 円 (内訳 航空券代 94,680 円の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は, その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、The 7th International Self-Determination Theory Conference 2019 への参加にあたり、旅費補助金を賜りましたこと、心より感謝申し上げます。以下、当該会議の概要および成果等についてご報告いたします。

学会の概要

International Self-Determination Theory Conference は、3年に1度開催されている自己決定理論 (Self-determination theory) に関する国際学会であり、7回目となる本大会では、40ヶ国以上から自己決定理論を専門とする研究者が集いました。大会期間中は、ポスター発表や口頭発表に加え、キーノートスピーチや、自己決定理論の提唱者である Richard M. Ryan 教授と Edward L. Deci 教授による講演、サイン会など、様々なイベントが企画されていました。

今回の学会が人生初の国際学会であったこともあり、国際学会がそもそもどのような雰囲気なのか十分なイメージをもたずに参加しました。いざ参加してみると、会場となったホテルは豪華でとても雰囲気がよく、国内では味わうことのできない知的好奇心を得ることができました。

学会での発表

本大会で、私は自己決定理論の下位理論の一つである有機的統合理論で概念化されている動機づけの一つである「同一化的調整 (identified regulation)」が外国語学習で果たす役割について、学部より関心を抱いてきたバフチンの対話理論を援用して議論したものを発表しました。実証的なデータ収集はこれからであり、理論的考察を中心とする発表となりましたが、インパクトのあるタイトルをつけたためか、想像以上に多くの研究者がポスターを見て、様々な質問を投げかけてくださり、中には同一化的調整の重要性に共感してくださる方もいました。こうした研究者同士の議論を通して、私自身、研究に対する動機づけをより一層高めることができ、自己決定理論の基本的心理欲求理論 (Basic psychological needs theory) が掲げる、自律性 (autonomy)、有能感 (competence)、関係性 (relatedness) への3つの欲求が充足される感覚を肌で感じることができました。

本大会で一番思い出に残っているのは、自己決定理論の提唱者である Ryan 教授と Deci 教授と直接話す機会を持てたことです。最新の著作のサイン会の際を利用して彼らのお目にかかることができたのは、卒業論文を執筆していた頃から研究の理論的枠組みに自己決定理論を活用してきた私にとって大きな刺激になりました。

学会参加を通して得たもの

本大会参加を通して、二つのものを得ることができました。一つは研究に対する意欲です。本大会への参加を通じて、自分の研究発表のフィールドを国内学会にとどめることなく、積極的に海外で発表していきたいと強く実感しました。国際学会というグローバルな空間で自身の研究をアピールしていけるよう、今後一層研究に励んでいきたいと思えます。もう一つは、海外の研究者とのネットワークです。国際学会に参加したことが無く、大会参加当初は海外の研究者と距離感が上手くつかめなかった中、本大会で発表を見に来てくださった研究者と知り合いになり、学会会場近くのレストランと一緒に食事に行く機会がありました。こうした経験を通じて築いた研究者ネットワークを大切に、いずれは世界中の研究者とコミュニケーションをとりながら、協同的に研究に従事していける研究者になりたいと感じました。

今後の抱負

自己決定理論では、自己決定性の観点から動機づけが捉えられ、これまで最も自己決定性の高い内的調整 (内発的動機づけ) の重要性が示されてきました。ただ、今回の私の発表でも議論したように、内的調整が必ずしもベストな動機づけでない文脈もあることも示唆されています。今回の経験を活かし、自己決定理論に新たな視座をもたらすことができるよう、今後より一層研究に邁進してまいります。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2019 年 9 月 23 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 日本女子大学人間社会研究科
博士課程前期 2 年

氏 名 和崎 夏子



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The European Conference on Visual Perception 2019 (ECVP2019) 2019 年ヨーロッパ視知覚会議
公式ホームページ URL	https://kuleuvencongres.be/ecvp2019
開 催 期 間	2019 年 8 月 25 日 ～ 2019 年 8 月 29 日
旅 行 期 間	2019 年 8 月 23 日 ～ 2019 年 8 月 31 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Belgium, Leuven, KU Leuven ベルギー, ルーヴェン, KU ルーヴェン
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	和崎夏子 日本女子大学大学院 人間社会研究科 竹内龍人 日本女子大学大学院 人間社会研究科 吉本早苗 広島大学大学院 総合科学研究科
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Effect of practice and chromatic information on gaze patterns during visual search 学習と色情報が視覚探索時の視線パターンに与える影響
補 助 金 額	68,000 円 (内訳 航空券代の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、The European Conference on Visual Perception 2019 (ECVP2019)への参加にあたり、国際会議等参加旅費補助金の申請を採択していただき、誠にありがとうございました。以下、参加しました学会についてご報告いたします。

【学会概要】

ECVP は 1978 年より毎年開催される、心理学、認知・神経科学などの領域におけるヒトの視知覚に関する研究を扱う学会である。今年は 2019 年 8 月 25 日～29 日に渡り、ベルギーのルーヴェンで開催された。報告者は、8 月 29 日のセッションにて”Effect of practice and chromatic information on gaze patterns during visual search”（学習と色情報が視覚探索時の視線パターンに与える影響）というタイトルでポスター発表を行った。

【発表報告】

1. 報告者の研究発表

現実場面の視覚探索において、色の付加や学習を重ねることにより反応時間の短縮といった視覚探索のパフォーマンス向上がみられるが、その背後にある認知メカニズムは同じなのか？本研究では、実験参加者が初見の地下鉄路線図からターゲットとなる駅の視覚探索中の視線を計測し、各認知メカニズムに付随するとされる視線パターンを解析することにより色の付加と学習による視覚探索パフォーマンス向上の背後にある認知メカニズムについて検討した。その結果、視線パターンの特徴より色、学習の効果ともに課題に関連する領域に対する選択的注意の精緻化がみられた。また、色の効果のみ、路線図の全体的処理が行われており、色と学習による視覚探索のパフォーマンス向上の背後にある認知メカニズムは異なることが示唆された。

ポスター発表を通して、多くの参加者と活発な議論を交わすことができた。議論をしながら、今後の展望について多くの示唆を得ることができた。

2. 他の研究発表

学会参加を通して、視知覚に関する研究が様々な領域からアプローチされていることを改めて感じた。またその一方で、今回の発表の中には、報告者と類似したテーマを扱う研究が複数みられた。それらの発表からは、研究・分析手法とともに学ぶことが多く、自身の研究に関する今後の課題について考えることができ有意義であった。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2019 年 8 月 30 日

(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 名古屋大学教育発達科学研究科
博士後期課程 2 年

氏 名 陳 佳玉



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The 13th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology (AASP) 第 13 回 アジア社会心理学会
公式ホームページ URL	https://taipei.asiansocialpsych.org/
開 催 期 間	2019 年 7 月 11 日 ～ 2019 年 7 月 13 日
旅 行 期 間	2019 年 7 月 10 日 ～ 2019 年 7 月 14 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	台北・台湾 中央研究院・Academia Sinica
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	陳佳玉・五十嵐祐 名古屋大学大学院 教育発達科学研究科
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	An Experiment for Investigating Effects of Cognitive Resource Disparity on Acceptance of Outgroup Members 認知的資源量の格差が外集団成員に対する受容行動に与える影響について
補 助 金 額	38000 円 (内訳 航空券、宿泊費、学会参加費の一部)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度、日本心理学会より国際会議等参加旅費補助金制度から助成いただき、The 13th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology への参加することができました。心より感謝を申し上げます。以下にて学会での研究発表および成果について報告いたします。

【活動概要】

The 13th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology は台北の中央研究院で2019年7月11-2019年7月13日の三日間に渡って開催された。報告者は7月11日の12:00-13:00間にポスター発表を行った。初日の発表であるため、台湾、韓国、日本からの研究者の方々が報告者のポスターを訪れた。また、自身の研究分野に関わる講演および関心のあるシンポジウムをめぐって、参加した。三日間の参加で有意義な時間を過ごした。

【報告者の発表成果】

自分の報告は、現実社会における貧富格差の深刻化や社会階層の硬直化という社会問題をはじめ、オンライン実験の内容と結果を紹介した。オンライン実験を通じて、社会経済的格差が存在する場合、上位者が上位者同士をパートナーとして選択する傾向がある一方、協力的下位者に対して利他的傾向が示されたということを明らかにした。台湾国立大学のFeng先生はオンライン実験と現実世界にはギャップが存在するという点を指摘した。また、Sungkyunkwan大学のJuhyeon Seoさん(Hoon-Seok Choi研究グループ)は、囚人のジレンマゲームのマトリックス表について、より詳しい説明が求められた。そして、帝塚山大学の谷口先生から社会経済的地位(SES)と実験参加者が獲得したボーナスについて、2点のコメントをいただいた。1. 個人差変数としての主観的社会経済的地位と参加者の協力的意思決定との関連性がどうなるだろうか 2. ボーナスを設定する(インセンティブあり)場合、なぜ利他的傾向が見られたかという結果についての考察。それらの問題にはさらなる検討が必要となる。ポスター発表のおかげで、国内外の研究者とのコミュニケーションが一層増えて、有意義なコメントを頂けた。

【他の研究プログラム】

北山先生のスピーチは、文化“get under skin”の視点から文化研究を行うのはなかなか面白いと思う。文化心理学とバイオロジーの結合には新たな研究方向性が指摘された。Hoon-Seok Choi研究グループのSym-Coinシステムについて、同じような理論システムが異なる社会的構造に適用するかどうかというコメントが興味深いと思う。

また、ジレンマゲームの研究について、バランス理論と囚人のジレンマゲームの結合のような実験が報告された。結論としては、不均衡な構造における関係性に、不確実性が生じたため、協力率が低下していくということが明らかにされた。気候変化と環境問題におけるジレンマゲームのデザインが面白かったと思う。あそこにおけるフィードバックの遅延が参加者の意思決定に与える影響に対して関心を持っている。

不平等性の研究については、東南アジアの国では大規模な調査が行われた。そちらの議論が主に社会経済的格差が人々のパフォーマンスとウェルビーイングに与える影響に集中している。貧富格差と社会階層の硬直化問題がグローバルな問題になりつつあると考えられ、不平等性の維持にある心理的基盤を明らかにすることが求められている。

本学会の参加により、報告者は貴重な経験を積み重ねられている。今回の学会で得られた貴重な経験をいかして、今後とも積極的に研究を行っていきたい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2019 年 7 月 10 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 名古屋大学教育発達科学研究科
博士前期課程 2 年

氏 名 澤田 昂大



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The 13th biennial conference of Asian Association of Social Psychology (AASP) 第 13 回アジア社会心理学会大会
公式ホームページ URL	https://taipei.asiansocialpsych.org
開 催 期 間	2019 年 7 月 11 日 ～ 2019 年 7 月 13 日
旅 行 期 間	2019 年 7 月 10 日 ～ 2019 年 7 月 14 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Taipei, Taiwan, Academia Sinica 台湾・台北・中央研究院
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	澤田 昂大 (名古屋大学大学院教育発達科学研究科) 五十嵐 祐 (名古屋大学大学院教育発達科学研究科)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	When the Two Become the one: Indiscriminative Retaliation against Others under Unidentifiability 2 人が 1 つになるとき：識別不可能な状況における複数他者への無差別報復 に関する検討
補 助 金 額	38,000 円 (内訳 宿泊費, 航空券代金, 大会参加費)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、国際会議等参加旅費補助金より助成を頂き、The 13th biennial conference of Asian Association of Social Psychology (AASP) への参加および口頭発表をさせて頂きましたこと、心より感謝申し上げます。以下に大会概要と、発表者の発表成果を報告させていただきます。

【大会概要】

The 13th biennial conference of Asian Association of Social Psychology (AASP) は、台湾の台北市、中央研究院 (Academia Sinica) において、2019 年 7 月 11 日から 7 月 13 日にかけて開催された。社会心理学領域ではアジア最大規模の国際学会であることから、各国から多数の研究者・学生が参加し、連日開催される様々なセッションおよびシンポジウムにて発表や議論が行われた。また、社会心理学領域にとどまらず、隣接するその他の心理学領域や、学校教育領域の研究者らの参加も多く見受けられた。

【発表成果】

発表者は、“When the Two Become the one: Indiscriminative Retaliation against Others under Unidentifiability” という題目で 15 分程度の口頭発表および参加者との討論を行った。発表者は、匿名空間における行為者の識別可能性に着目した実験室実験の結果をふまえ、匿名性が担保されることによって生じる「誰が自分に対して敵対的行為をはたらいたのかわからない」という状況において、無実の他者にも影響を及ぼす無差別的な報復行動が、識別可能な空間と比較して大きく促進されることを報告した。さらに、他者の識別が不可能な状況において、人物群をひとつの「まとまり」とみなす人間の認知的ヒューリスティックスがこの現象の背景にある可能性を示し、従来の研究では集団間葛藤の文脈で説明されてきた集合罰や代理報復のメカニズムとの関連について議論を行った。

研究から得られた知見および発表者が行った主張について、セッションの参加者からは概ね支持されたようであった。質疑応答では、実験の手続きの詳細について説明を求められる場面があった。

また、発表者が発表を行ったセッションは日本人研究者が多く、全員の発表の前後にも活発な意見交換が行われた。発表者の研究についても、貴重なコメントを頂いた。

【その他】

自身の発表以外のセッションにも積極的に参加し、研究的視野を広げることができた。

今回の AASP では、土着心理学 (indigenous psychology) の手法による質的研究の事例報告や、複数の国の参加者を対象とした国際比較研究の報告が活発に行われており、文化的視点による研究が全体的に多く見受けられた。基調講演でも、認知神経科学の手法を用いた比較文化研究の報告や、文化心理学の歴史に関するレビューが行われ、心理学的視点から「文化とは何か」を問う機運の高まりを感じられる大会であった。

発表者にとって、今回が初の国際学会であったが、先に記した発表成果の他、大会 2 日目に開催された懇親会で他国の若手研究者らと親睦を深めるなど、これまでにない経験を得ることができた。今回の参加で得られた研究的視野をもとに、今後も積極的かつ有益な研究活動を行い、次の国際学会発表につなげていきたい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2020 年 3 月 7 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名
同志社大学大学院 心理学研究科 博士後期課程

氏 名 横井良典



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The Society for Personality and Social Psychology Annual Convention 2020 アメリカ・パーソナリティ・社会心理学会 2020 年大会
公式ホームページ URL	http://meeting.spsp.org/
開 催 期 間	2020 年 2 月 27 日 ～ 2020 年 2 月 29 日
旅 行 期 間	2020 年 2 月 26 日 ～ 2020 年 3 月 1 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Hyatt Regency in New Orleans (アメリカ・ルイジアナ州・ニューオーリンズ・ハイアットリージェンシー)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	横井良典 (同志社大学大学院心理学研究科) 中谷内一也 (同志社大学心理学部)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Shared Utilitarian Beliefs Influence Trust in Autonomous Vehicles, but Shared Deontological Beliefs Do Not (功利主義の共有は自動運転への信頼に影響するが, 義務論の共有は効かない)
補 助 金 額	68,000 円 (内訳 宿泊費, 参加費, 現地での生活費の一部として使用)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は, その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、The Society for Personality and Social Psychology Annual Convention (以下、SPSP) への参加にあたり、貴会の国際会議等参加旅費補助金を頂戴いたしました。心より感謝申し上げます。以下、活動報告でございます。

◆学会概要

SPSP は、パーソナリティや社会心理だけでなく、動機づけ、教育など、多様な分野の研究者も集う大規模な国際会議である。SPSP2020 年大会は、3 日間にわたって開催された。初日から、プレカンファレンスだけでなく、ポスターセッションがあるなど、3 日間を通して、研究交流が活発に行われていた。

◆活動成果

1. 自身の研究発表について

申請者は学会最終日の 14:15~15:15 の 1 時間のポスターセッションにおいて、研究発表を行った。今回発表した内容は、自動運転自動車に対する信頼の規定因を検討したものであった。

オーディエンスとは、発表した研究の内容はもちろん、過去に行ってきた研究についても議論することができた。それによって、お互いの執筆論文について情報交換することにつながった。また、ある研究者からは、結果の解釈について疑問を投げかけられた。申請者自身の解釈をオーディエンスに納得させることに苦勞し、スムーズに説明することはできなかった。この点は次回の反省材料として、今後の研究活動に活かしていきたいと考えている。

2. 他のポスター発表への参加について

SPSP は例年、幅広い分野の研究者が集まる大会なので、あえて申請者自身の専門とは異なる分野（性差や動機づけなど）にも積極的に足を運んだ。他の発表を聞くにあたって、申請者は「ある結果に対する別の解釈の提供」を重点的に行った。別の解釈を提供することで、単に一問一答のやりとりではなく、発表者自身の考え・主張を引き出すことができた。普段はなかなか触れることはなかった分野の研究を知ること、新しい研究の発案・多様な背景知識の習得につながった。

3. シンポジウム・ワークショップへの参加について

SPSP は大規模な国際会議であるため、開催されるシンポジウムおよびワークショップの数も非常に多かった。申請者は主に、Moral Decision や Victim といったキーワードを含む道徳心理に関するシンポジウムに足を運んだ。申請者も近年、モラルジレンマ研究に力を入れていることもあり、方法論的に参考になる研究が多く紹介されていた。

しかし、申請者が参加したシンポジウムの中で、最も有益だったのは検定力分析に関するシンポジウムであった。近年、サンプルサイズを決める際に検定力分析が用いられることが多い。申請者が参加したシンポジウムでは、検定力の正しい意味、検定力分析を行う多様な意義、検定力分析の多彩な実施方法など、得られるものが非常に多かった。特に、検定力分析を実施できるソフトについて、G Power や R 以外のものが紹介されており、すぐに実践できる知識を身に着けることができた。

今回の学会参加は、総じて方法論の観点から学ぶことが非常に多く、自身の研究に即座に応用できる知識を身に着けることができた。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2019 年 8 月 30 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 名古屋大学大学院 教育発達科学研究科
心理発達科学専攻
氏 名 小笠原 香苗



□
下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The 13th biennial conference of the Asian Association of Social Psychology 第 13 回 アジア社会心理学会
公式ホームページ URL	https://taipei.asiansocialpsych.org/?src=nav
開 催 期 間	2019 年 7 月 11 日 ～ 2019 年 7 月 13 日
旅 行 期 間	2019 年 7 月 10 日 ～ 2019 年 7 月 14 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Taiwan, Taipei, Academia Sinica (台湾・台北・中央研究院)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	小笠原 香苗 (名古屋大学大学院 教育発達科学研究科) 中川 敦子 (名古屋市立大学大学院 人間文化研究科)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	The Effect of Preparation Time on "Choking Under Pressure" 準備期間が「あがり」に与える影響
補 助 金 額	38,000 円 (内訳 航空券代および宿泊費の一部)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、日本心理学会による国際会議等参加旅費補助金に採択していただき、The 13th biennial conference of the Asian Association of Social Psychology に出席、発表させていただけたことに、厚く御礼申し上げます。以下、活動内容およびその成果について、ご報告させていただきます。

【活動内容】

1. 自身の研究発表

報告者は、大会初日の7月11日に口頭発表を行った。発表を行った研究の内容は、スピーチをする前にスピーチに関する心理的・物理的準備の有無が、スピーチ中の失敗の認知に与える影響の検討についてである。加えて、失敗を認知した際の心理・生理的变化の違いについても検討した。結果として、スピーチの前に準備をしていない場合には、スピーチ中に失敗を認知する者の割合が高いことが示された。また、失敗を認知した者のみを抽出して、実験全体の主観的緊張感、心拍数の値を検討したところ、準備期間あり群ではスピーチ前半の心拍数の値が高いことが示された。一方、準備期間なし群ではスピーチ予期時の主観的緊張感の値が高いことが示された。これらの結果から、準備期間の有無によって、スピーチの失敗を認知する際の手がかりが異なることが示唆された。

今回の学会では、報告者の発表時間以外においても、多くの研究者と建設的な議論を行い、意見をいただくことができた。タイトルの“choking under pressure”に関して、今後も同様のテーマで研究していくにあたり、どのような点を押さえなければならないか、といった報告者の研究の根本にかかわる議論も行われ、大変有意義な時間を過ごすことができた。また、今後の展望についての質問や意見もいただくことができ、研究へのモチベーションの高まりにつながった。

加えて、今回の口頭発表では、セッションの座長を任せていただき、同じセッションの発表者に加え、オーディエンスや運営側の方ともコミュニケーションを取ることとなった。セッション終了後には、発表者・オーディエンス・運営の方々と写真を撮るなどの交流を図り、非常に貴重な経験をすることができた。

2. 発表以外の大会への参加

自身の発表以外にも、シンポジウムや口頭・ポスター発表に参加した。シンポジウムでは、“cultural neuroscience”についての講演が印象的であった。また、発表に関しては、「笑顔が消える」ことに関する研究が印象的であった。欧米より日本のほうが「笑顔が消える」ことに関して敏感であり、その中でも引越しの回数が多い人のほうが「笑顔が消える」ことに関して敏感であるという内容であった。報告者自身の研究と直接かかわる領域ではないが、非常に興味深い内容であった。

また、セッションの途中のティーブレイクにおいても、研究者と意見を交わすことができた。ティーブレイクでは、セッション中のような緊張感もなく、和やかな雰囲気の中での研究に関する議論をすることができた。先行研究に基づく知見ではなく、思いついた感想のようなものを言い合うことができ、研究が楽しいと感じることのできる場となった。

【所感】

自身の発表に関しては、有益なコメントを得ることができたと同時に、海外の研究に触れることができ、国際学会らしい収穫を得たと感じています。滞在期間は短かったですが、自身の研究意欲を刺激してもらいました。

また、本学会には日本の研究者も多く参加していました。国際学会という場でありながら、日本人研究者とも接する機会が多く、今後につながるコネクション形成のきっかけとなったと感じています。今回このような機会を与えてくださった本助成制度ならびに日本心理学会に心より感謝申し上げます。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2020 年 3 月 11 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 同志社大学大学院心理学研究科
博士課程(後期課程)

氏 名 柴田侑秀



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The Society for Personality and Social Psychology 2020 Annual Convention ソーシャル&パーソナリティ心理学会 2020 年度大会
公式ホームページ URL	http://meeting.spsp.org/?_ga=2.166132669.2054867214.1583300076-1206297970.1551943372
開 催 期 間	2020 年 2 月 27 日 ～ 2020 年 2 月 29 日
旅 行 期 間	2020 年 2 月 26 日 ～ 2020 年 3 月 2 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Hyatt Regency, New Orleans, US ハイアットリージェンシー、ニューオーリンズ、アメリカ合衆国
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	柴田侑秀(同志社大学大学院) 中谷内一也(同志社大学)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Influence of Perceived Likelihood of Victimization on Fear of Crime 犯罪不安に対する主観的確率の影響の検討
補 助 金 額	68000 円 (内訳: 交通費・宿泊費・学会参加費の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【SPSP2020】

2020年2月27日から29日にかけてアメリカのニューオーリンズで開催された、The Society for Personality and Social Psychology 2020 Annual Conventionに参加した。本学会は社会心理学を中心とするものであり、アメリカだけでなくカナダやドイツ、インドといった諸外国からの参加者も多く、様々な社会背景をベースとする研究に触れることができた。

【発表報告】

申請者は、29日の9:15から行われたポスターセッションに参加した。そこで、犯罪不安に対する主観的確率の影響を検討した実験の結果を発表した。犯罪不安は犯罪被害にあうことに対する不安であり、これが被害にあう確率の推定に影響されることが先行研究では指摘されていた。しかし、主観的確率が犯罪不安の原因になるという因果関係についてはまだ明らかにされていなかった。そこで、申請者は、実験参加者に実際の犯罪認知件数を提示することで主観的確率を操作し、犯罪不安に影響するかどうかを確かめた。その結果、主観的確率が犯罪不安の原因となることが確かめられた。

発表は時間的にも余裕があり、訪れた参加者と十分に議論することができた。もっとも、学会それ自体が社会心理学を中心に扱っているためか、犯罪に対する感情的な反応の生起メカニズムについて興味を持ってもらいにくい印象もあった。

なお、これは余談ではあるが、犯罪不安研究ではよく犯罪不安を「夜に一人で道を歩くことがどのくらい不安に感じるか」と尋ねることがある。その研究が中心に行われているアメリカの街道の、夜の暗い姿を直にこの目で見ることも良い経験であった。

【その他の発表】

SPSPの発表やシンポジウムは全体的に、現在話題となっている社会問題を扱おうという機運の高いものであった。Presidential plenaryではAIやビックデータによって発生するバイアスについて取り上げられた。ほかのシンポジウムではフェイクニュースの話題が挙げたほか、ポスターセッションでも人種的あるいは性別的なバイアスを取り上げたものが目立った印象だった。

また、テキスト分析のような方法論を取り上げたシンポジウムもあり、かねてから興味を持っていたため非常に興味深く聞いた。方法論も実際の研究や手続きを交えながらであると理解しやすく、自身の研究計画と関連させて考えることができた。

【最後に】

学会参加にあたり、多大なご支援をしてくださった日本心理学会に心よりお礼申し上げます。今回の経験を糧に、一層研究に尽力いたします。ありがとうございました。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2019 年 12 月 19 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名
東京大学人文社会系研究科 博士課程
氏 名 小西 慶治



□

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	Psychonomic Society's 60th Annual Meeting (基礎心理学会第 60 回大会)
公式ホームページ URL	https://www.psychonomic.org/page/2019annualmeeting
開 催 期 間	2019 年 11 月 14 日 ～ 2019 年 11 月 17 日
旅 行 期 間	2019 年 11 月 13 日 ～ 2019 年 11 月 18 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Canada, Montreal, Palais des congrés de Montréal カナダ・モントリオール・モントリオール国際会議場
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	小西慶治 (東京大学)・横澤一彦 (東京大学)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Dynamic non-speech stimuli modulate the ventriloquist effect in situations with multiple events 非話者刺激の動的情報が複数の視覚刺激提示下の音源の誤定位を調整する (※申請時とは題目が変更になりました)
補 助 金 額	68,000 円 (内訳 航空券代 117,430 円の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、国際会議等参加費補助金の助成をいただき、Psychonomic Society's 60th Annual Meeting への参加、およびポスター発表をさせていただきましたこと、心より感謝申し上げます。以下に、発表概要および成果をご報告いたします。

1. 学会の概要

本大会は、Psychonomic Society が毎年開催している国際的な年次大会である。Psychonomic Society's 60th Annual Meeting はカナダ、モントリオールにあるモントリオール国際会議場にて、11/14~11/17 の日程で開催された。2,200 名を超える基礎心理学の研究者が参加し、シンポジウムに加えて、300 件超の口頭発表、1000 件超のポスター発表が行われた。本大会に先立って、10 余りの下部組織のワークショップが併せて開催された。4 日間にわたって、教授、研究員、学生が活発に議論する場となった。

2. 発表内容

報告者は、15 日夕方の多感覚知覚 (Multisensory perception) のセッションにて、"Dynamic Non-Speech Stimuli Modulate the Ventriloquist Effect in Situations with Multiple Events. (非話者刺激の動的情報が複数の視覚刺激提示下の音源の誤定位を調整する)" という題目で、ポスター発表を行った。発表の概要を以下に示す。

本研究は実験によって、演奏場面において、楽器と音との整合性が、視聴覚統合に寄与することを示した。その意義は、視覚情報と聴覚情報の整合性という高次要因が、視聴覚統合に寄与する、という現象が、ヒトの顔と声を用いない場合でも観察されることを示したことにある。これは、整合性の視聴覚情報の統合への寄与は一般的であることを支持するものである一方で、整合性が影響するのはヒト刺激を用いた場合に限りという先行研究の知見に反するものであった。本発表では、こうした齟齬は、ヒトの顔刺激の特殊性を、高次要因による統合プロセスに帰属するのではなく、整合性判断プロセスの厳しさに帰属することによって説明できる可能性を提案した。豊富な情報を含んだ実験刺激を用いることによって明らかになる複雑な視聴覚統合プロセスの一旦を明らかにしたと位置付けている。

幸いにも、視聴覚統合の分野における著名な研究者である Jean Vroomen 教授 (Tilburg University) と議論できた。また、彼の研究室で PhD を取得した Ilja Frissen 准教授 (McGill University) からは、「顔じゃないもので腹話術効果を検討するのは面白い。重要だと思う。」と評価していただいたことから、視聴覚統合の理論構築において、生態学的妥当性の問題と刺激特異性の問題に取り組む必要性を再確認できた。

3. 学会参加状況

報告者は、Object Perception, Attention, & Memory (OPAM) と Auditory Perception, Cognition, and Action Meeting (APCAM) の二つのサテライトワークショップと本大会に出席した。記憶・学習・問題解決・意思決定・言語・注意・知覚など多岐に渡る分野の研究が発表されていた中で、注意や知覚の分野のセッションを中心に、注意と行動、注意とワーキングメモリー、多感覚知覚、知覚と運動などのテーマを中心にポスター、口頭発表を聴講した。また多感覚研究は、言語 (単語認知における感覚モダリティの影響) や学習 (複数の感覚モダリティを用いた学習) をはじめ、セッションの区分けにおさまらず、様々な研究者がそれぞれの角度から取り組んだ知見に触れることができた。

世界中の最先端の研究を目の当たりにして、視野が広がったと感じています。今回の経験を糧として、今後の自らの研究を発展させていく所存です。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2019 年 10 月 15 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 大阪市立大学文学研究科人間行動学
専攻心理学専修前期博士課程

氏名 齊藤直紀



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	International Conference Cognitive Science 2019 * 国際認知科学会 2019
公式ホームページ URL	https://iccs2019.github.io/
開 催 期 間	2019 年 8 月 22 日 ～ 2019 年 8 月 24 日
旅 行 期 間	2019 年 8 月 21 日 ～ 2019 年 8 月 25 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Korea・Seoul・Seoul National University * 韓国・ソウル・ソウル大学校
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	齊藤 直紀 (大阪市立大学文学研究科)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	The Effect of Content in Moral Dilemma Problem (モラルジレンマ課題における課題文が判断に与える影響)
補 助 金 額	38,000 円 (内訳 航空運賃: 27,360 円 宿泊費: 33,257 円) * 航空運賃と宿泊費が申請書の金額と異なっております

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

[活動報告及び成果]

2019年8月21日に予定通り韓国のソウルに到着し、翌22日より国際認知科学会2019 (ICCS2019)に参加いたしました。会期は22日から24日までであり、認知科学に関する多くの講演が行われました。

私は24日の12時から15時までのポスター発表を行いました。モラルジレンマ課題における課題文が判断に与える影響について発表いたしましたが、在籍時間3時間の間に約10名の参加者の方が説明を聞きに来てくださり、質問者様の専門領域に則した多くの質問をしていただき、非常に有意義な議論をすることができました。

本学会には心理学を研究されている方だけではなく、認知科学を研究されている方も多く参加されており、心理学とは違う側面からのご質問、ご指摘をしていただくことができました。

本研究においては、モラルジレンマ課題における課題文の影響のみに焦点を当てた研究計画を立て実験を行いましたが、質問者からの多くの意見を通じて、課題の判断にかかる時間の測定といった、多くの側面からの要因の測定を提案していただきました。今後の研究では、今回の学会でいただいたご意見を参考にし、研究を洗練させていこうと考えております。

また、認知科学の研究をされている方から、このような人間の推論のしくみを知る研究は、今後のAI研究において重要な知見となる、というお話をしていただき、本研究分野の重要性を再確認することができると同時に、他の分野の研究に関する知見を得る必要があることを痛感しました。

以上より、本国際会議に参加し、参加者の方と議論をさせていただく中で、自身の研究分野の必要性、本研究の欠点や新しい観点、および他分野を学習する重要性を理解することができました。本会議で得た知見を、今後の研究に有意義に生かしていきたいと考えております。

そして、今回の国際会議への参加にあたり、多大なご支援をしてくださった日本心理学会およびご担当の先生方に深く感謝いたします。誠にありがとうございました。

[付記]

今回の報告書において、補助金額の欄に内訳に記入しました航空運賃と宿泊費の金額が、申請書の金額と異なっております。航空運賃は購入日の金額、宿泊費は当日(8月25日)の為替レートに従って記入しております。また、航空運賃と宿泊費の合計は60,617円ですが、採択された補助金額が38,000円のため、補助金額の欄には38,000円と記入しております。ご了承ください。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2019 年 8 月 24 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 徳島大学大学院総合科学教育部臨床心理学専攻
博士前期課程 2 年

氏 名

町田 規憲



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	9 th World Congress of Behavioural and Cognitive Therapies 2019 (第 9 回世界行動療法認知療法会議)
公式ホームページ URL	https://wcbct2019.org/
開 催 期 間	2019 年 7 月 17 日 ～ 2019 年 7 月 20 日
旅 行 期 間	2019 年 7 月 15 日 ～ 2019 年 7 月 22 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Messedamm 22 The CityCube Berlin, Germany (ドイツ・ベルリン・シティーキューブ・メッセダム 22)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	町田規憲 (徳島大学大学院 総合科学教育部 臨床心理学専攻), 佐藤健二 (徳島大学大学院 社会産業理工学研究部)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Preliminary study of effects of Interventions Focused on Detached Mindfulness & Metacognitive Believe on Worry of Non-clinical Sample Compared to the effects of two Detached Mindfulness Techniques (非臨床サンプルのディタッチトマインドフルネスと心配に関するメタ認知的信念に焦点化した介入効果の予備的検討: 2つのディタッチトマインドフルネス技法の効果比較)
補 助 金 額	68,000 円 (内訳 往復の渡航費と宿泊費 236,893 円の一部)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【活動内容】

2019年7月17日～20日にかけて、ドイツのベルリンにて開催された9th World Congress of Behavioural and Cognitive Therapies 2019に参加し、7月18日の9:00～11:30に” Preliminary study of effects of Interventions Focused on Detached Mindfulness & Metacognitive Believe on Worry of Non-clinical Sample: Compared to the effects of two Detached Mindfulness Techniques”という題目でポスター発表を行った。7月17日には Process-Based Therapy に関する1日ワークショップへ参加し、臨床家の方々と複数回のグループワークに参加できたほか、7月18日から20日にかけては、自身の専門領域や関連領域以外も含めた様々なシンポジウム、講演、ポスター発表等に参加した。

【成果】

1. 自身の研究発表

申請者の研究発表は、過剰な心配の傾向が高い者（高心配性者）に対する短期的介入として、メタ認知理論に基づく2種類の介入の効果比較を予備的に実施したものである。まず心配性傾向の高い大学生および大学院生8名を注意焦点化群（AF群：3名）、心配延期実験群（WPE群：3名）、介入待機群（WLC群：2名）にブロック化を用いて割り付けた。全ての参加者は、介入実施前（Pre）、初回介入の1週間後（Post1）、初回介入の2週間後（Post2）に調査へ回答した。AF群およびWPE群への初回心理教育では、過剰な心配とその維持パターン、および新たな対処パターンについて説明し、言語的、体験的理解を促した。続いて新たなパターンの獲得法として、AF群には注意訓練法、WPE群には心配延期実験をそれぞれ紹介し、ホームワークとした。1週間後の第2回心理教育では、AF群およびWPE群に共通して、心配とメタ認知的信念の関連について説明し、メタ認知的信念の妥当性についての体験的理解を促した。続いて心配と付き合いながらメタ認知的信念を検証する手法として、心配延期実験と実験記録をホームワークとした。結果として、AF群とWPE群はWLC群と比して非常に大きく過剰な心配を低減していたが、両介入群間に差は認められなかった。ただし媒介変数の変化から、AF群の方がより大きな効果を発揮しうる可能性が示唆された。

ポスターセッションは2.5時間であったが、その間に多くの研究者や臨床家が訪れ、本研究内容や今後の研究構想に対するご意見やご質問を複数賜った。その中には本テーマを直接ご専門とされていない方も多く含まれており、自身の研究を見つめなおす機会になるとともに、双方の専門性を共有することで互いに新たな気づきを得ることができた。一方、申請者の英語力不足から十分に情報を伝えられなかった面もあり、次回に向けて研鑽を積む必要性を痛感した。

2. 他の研究発表

申請者の研究に関連するテーマであるマインドフルネス、注意制御、反復性思考に関する様々なシンポジウム、ポスター発表が行われていた。しかしその研究の方向性や、現象に対する各研究者の捉え方、当該研究領域に残された問題点についての認識は、研究者間でも一致している点と必ずしも一致していない点があり、世界の研究動向を知るとともに、それら議論から自身の研究に関する必要性やオリジナリティ、今後の課題について考える契機となった。また他の参加者との議論を通して、相手に対するリスペクトの姿勢やその示し方に感銘を受けるとともに、自身もまた、次回に向けてそうした姿勢を身に着けていきたいと感じた。

【最後に】

この度は、申請者の発表に対し、国際会議等補助金をご助成いただきましたこと、心より感謝申し上げます。今回の会議で得た新たな知見、考え、つながりを、今後の研究生活に活かしていく所存です。日本心理学会、ならびに学会関係者の皆様、誠にありがとうございました。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2019 年 07 月 29 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名

京都大学大学院
人間・環境学研究科
博士後期課程 1 回生

氏 名

KOH Alethea



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	6th World Congress on Positive Psychology
公式ホームページ URL	https://www.ippaworldcongress.org/
開 催 期 間	2019 年 07 月 18 日 ～ 2019 年 07 月 21 日
旅 行 期 間	2019 年 07 月 17 日 ～ 2019 年 07 月 23 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Australia, Melbourne, Melbourne Exhibition Centre オーストラリア・メルボルン・メルボルン展示センター
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	コー・エリティア KOH Alethea
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Not just who you are, but where you are from: The Contextual Effect of Cultural Values on Personality and Life Satisfaction
補 助 金 額	68000 円 (内訳 往復航空券 103850 円の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、申請者が 6th World Congress on Positive Psychology (IPPA) に参加するにあたり、日本心理学会国際会議等参加旅費補助金をいただきました。厚く御礼申し上げます。以下、参加学会について報告いたします。

【学会概要】

The World Congress organized by the International Positive Psychology Association (IPPA) is a dynamic and international event that connects more than 1600 delegates across 60 nations and disciplines for the purpose of furthering positive psychology and the well-being of humankind. Delegates from academia, private and public institutions meet to advance current research trends and practices, while forming collaborative networks and discussing the future outlook for the field. The current congress was held from 18th to 21st July, at the Melbourne Exhibition Centre in Melbourne, Victoria, Australia.

【自身の発表】

At this congress, I presented a poster entitled “Not just who you are, but where you are from: The Contextual Effect of Cultural Values on Personality and Life Satisfaction”. This poster summarized the results of a study I collaborated on, which showed that the specific personality traits of extraversion and neuroticism had differential relationships with well-being dependent on the cultural values of the country the individual belongs to. In this study, we used Inglehart’s cultural dimensions of traditional versus rationalism (TR) and survival versus self-expression (SS) as an indicator of the values of a country as a function of economic development. Specifically, I shared that extraverted individuals experience higher life satisfaction the more their culture values rationalism/secularism while neuroticism has a stronger negative relationship with life satisfaction in more survival-oriented cultures.

【活動報告】

Throughout the congress, I attended multiple keynote presentations, symposiums, poster sessions and was very inspired by the numerous research that were aimed to help people and improve well-being, which is my main motivation in research as well. Of note were the presentations by Sara Algoe, Barbara Fredrickson, Sonja Lyubomirsky and Judith Moskowitz, where their insights, ongoing research plans and future directions were enlightening for me in order to understand what is sorely needed in the current field of research, and also see how their new concepts and ideas could potentially bridge the gaps in my own research. I was especially interested the topic of positivity resonance as the idea of reciprocal and meaningful social connection contributing to well-being was in line with my ongoing research on the emotion of being moved due to social relationships (kamamuta).

I was able to have many meaningful discussions with various researchers as well during the poster sessions, where I found delegates with similar research focus and shared our opinions and advice on each other’s works. I also learnt about new research scales that could be applicable in my research, such as the Self-encourage and Compassion Skills Scale developed by Yoga Tokuyoshi and the Prioritizing Positivity Scale by Lahnna I. Catalino and colleagues.

Overall, I gleaned a wealth of knowledge through participating in this congress, and I am very grateful for the opportunity to do so.

国際会議等参加旅費補助金報告書

2020 年 3 月 28 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 兵庫教育大学大学院 学校教育研究科
人間発達教育専攻 修士課程 2 年
氏 名 瀧井 綾子



□
下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	9th World Congress of Behavioural and Cognitive Therapies 第 9 回 世界行動療法認知療法会議
公式ホームページ URL	https://wcbct2019.org/
開 催 期 間	2019 年 7 月 17 日 ～ 2019 年 7 月 20 日
旅 行 期 間	2019 年 7 月 13 日 ～ 2019 年 7 月 22 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	The CityCube Berlin, Germany ドイツ, ベルリン, シティキューブ
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	瀧井綾子 ¹ ・伊藤大輔 ¹ (1 兵庫教育大学大学院学校教育研究科)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	The relationship between foster behavior and job satisfaction and burnout of workers in Japanese social care institutions for children 社会的養護施設職員の養育行動と職務満足感およびバーンアウトとの関連
補 助 金 額	68,000 円 (内訳: 航空券代金の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合 (旅行期間や発表題目の変更など) は, その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、9th World Congress of Behavioural and Cognitive Therapies（第9回世界行動療法認知療法会議）への参加にあたり、貴学会の国際会議等参加旅費補助金への申請に採択いただきまして、心から感謝申し上げます。

以下に、当該学会の概要、発表の成果、および活動内容についてご報告いたします。

【大会の概要】

World Congress of Behavioural and Cognitive Therapies (WCBCT) は、3年に一度開催される、認知行動療法 (CBT) の国際会議である。毎回世界約 50 カ国から、2000 人以上が参加している。今回は、ドイツ・ベルリンのシティーキューブにて、7月17日から20日の間、開催された。

【発表の成果】

報告者は、現地時間で7月19日の15:00～17:30にポスター発表を行った。発表題目は、「The relationship between foster behavior and job satisfaction and burnout of workers in Japanese social care institutions for children（社会的養護施設職員の養育行動と職務満足感およびバーンアウトとの関連）」であった。

本発表では、日本全国の社会的養護施設職員を対象に、施設職員の養育行動と、職員自身のメンタルヘルスの状態との関連性を検討した調査研究の結果を示した。日本の社会的養護の特徴として、その8割以上が施設環境にて行われている現状がある。社会的養護施設の入所児の半数以上が被虐待経験を有しており、そのケアに携わる施設職員の負担は大きく、離職率が高いことが報告されている。施設職員のメンタルヘルスに影響を及ぼす要因の一つとして、職員の入所児に対する養育行動が考えられ、養育者の養育行動が養育者自身のメンタルヘルスに与える影響に関しては、家庭環境においては検討されているものの、施設環境においては未だ実証研究が不足している。施設職員の養育行動と、職務満足感およびバーンアウトとの相関分析を行ったところ、入所児の状態観察や、日常生活における時間と体験の共有、協同的な問題解決が、職務満足感や個人的達成感といったメンタルヘルスのポジティブ面と正の相関があり、入所児対応の一貫性のなさや、叱責、生活指導といった行動は、情緒的消耗感や脱人格化といったネガティブ面と正の相関があった。以上のことから、社会的養護施設における職務はストレスフルでありながらも、養育行動に目を向けることで、職務満足感などのポジティブ面を向上させることができる可能性が示唆された。

本研究は、本邦における社会的養護の特徴を反映したものであったことから、様々な国の研究者はもとより、日本の研究者とも沢山の議論を行うことができた。今後の研究に関して様々な意見を頂くことができ、有意義な経験となった。

【その他活動内容】

開催期間中、様々なシンポジウムや研究発表を聴講し、最新の研究動向に関する知見を得ることができた。特に、報告者が研究課題としている児童虐待に関しては、世界的な関心事であるようで、予防や被虐待児ケアなど、様々な視点からのシンポジウムや研究発表が行われていた。また、報告者は、これまで CBT では積極的に取り上げることが難しかった「愛着」に関して、CBT での取り扱い方に関するワークショップに参加し、愛着障害の行動レベルでの解釈の仕方など、新しい見方を学ぶことができた。

報告者にとって、今回は初めての国際学会への参加であり、国際的に著名な研究者と間近で会うことができたり、英語でのアカデミックなコミュニケーションをとったりと、数々の非常に貴重な体験をすることができた。今後の研究を進めていくにあたり、今回の経験を活かし、精進していきたい。

貴重な機会をいただけたことに、改めて感謝申し上げます。

報告書

日本国内での新型コロナウイルスの感染拡大状況を鑑み、貴学会の 2019 年度国際会議等参加旅費補助の助成対象であった Society for Personality and Social Psychology 年次大会（開催期間：2020 年 2 月 27 日～2 月 29 日，開催地：アメリカ・ニューオーリンズ）への参加を見合わせることを 2 月 24 日に決断致しました。主な理由は、(1) 国際線での長時間に及ぶ密閉空間での移動で私が感染者になる可能性，(2) 愛知県内で多数の感染者が出ていることから、私が既に感染していて現地の方々を感染させてしまう可能性，(3) アメリカの警戒レベルが上がり速やかに帰国できない可能性を考慮したためです。

購入していた航空券代の総額は 112,670 円でしたが、キャンセルに伴い、税金・燃油特別付加運賃などにあたる 34,670 円は返金されました。しかし、運賃にあたる 78,000 円は返金されませんでした。なお、添付した資料では、私と同伴者の 2 名分の金額が記載されています。

名古屋大学大学院教育発達科学研究科
博士課程前期課程 1 年
上田 皐介

国際会議等参加旅費補助金報告書

2019 年 08 月 11 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名
筑波大学大学院人間総合科学研究科
ヒューマン・ケア科学専攻

氏 名 王 巖 崧



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	41th International Annual Conference of the International School Psychology Association—ISPA Conference 2019 第 41 回 国際学校心理学会大会
公式ホームページ URL	https://www.ispa2019.ch/
開 催 期 間	2019 年 7 月 9 日 ～ 2019 年 7 月 12 日
旅 行 期 間	2019 年 7 月 8 日 ～ 2019 年 7 月 15 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	University of Basel, Basel, Switzerland バーゼル大学、バーゼル、スイス
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	王 巖崧 (筑波大学大学院人間総合科学研究科) 庄司 一子 (筑波大学人間系)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Special Needs Education at High School in Japan: Focusing on the case of part-time high school (日本の高校における特別支援教育 - 定時制高校の事例による検討 -)
補 助 金 額	68,000 円 (内訳 宿泊・航空費の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー，および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度、申請者は The International School Psychology Association (ISPA) 年次大会への参加及び研究発表を行うにあたり、日本心理学会より旅費補助を頂きました。記して感謝し、以下に、大会概要、自身の研究発表及び会議への参加状況について報告いたします。

【大会概要】

第 41 回国際学校心理学会大会は 7 月 9 日から 7 月 12 日にかけて、スイスのバーゼルで開催された。本大会は、国際学校心理学会 (International School Psychology Association : ISPA) が運営する年次国際大会であり、期間中、キーノート・スピーカーの講演やワークショップ、口頭発表、ポスター発表などが行われた。参加者の多くは、世界 40 カ国以上のスクールサイコロジストであり、子どもたちの成長を支援することに対する関心を持っている方々である。今回の大会のテーマは「Empowering People for Lifelong Learning」で、ホットトピックは「生涯学習」、「特別支援教育」、「共生」、「子どもの権利と幸福感」などであった。

【自身の研究発表】

7 月 10 日の 15:30~16:50 にポスター発表を行った。発表題目は「Special Needs Education at High School in Japan: Focusing on the case of part-time high school (邦訳：日本の高校における特別支援教育 - 定時制高校の事例による検討-)」であった。定時制の高校の事例を通して、定時制の高校の教員を対象にし、インタビュー調査を通して、特別支援教育に関する支援方法について検討し、他の高校における特別支援教育に活かせる経験を探るための研究であった。主な研究結果としては、学生ボランティア活動、教員が教育相談機関（スクールカウンセラーなど）との連携、情報共有、中学校訪問、専門家との連携などが重要であることが示された。これらの結果をポスターにまとめて、会場で 80 分の発表期間中、ナイジェリア、アメリカ、台湾、中国と日本の研究者とのディスカッションを通じて、結果の解釈を含め自分の研究を見直すことが達成した。また、外国の方々は「定時制高校」に対する関心が強く、様々な質問された。

【会議への参加状況】

3 日間を通して様々な講演を聴講し、最新の学校心理学の動向などについて知見を広げ深めることができた。また、不登校、特別支援教育に関する口頭発表、ワークショップにも参加し、他の国の研究動向を把握した。さらに、幅広い領域のポスター発表を聞きました。特に、SEL (Social and Emotional Learning) に関する研究への理解が深まった。今後、SEL に関する研究を力にしようと思う。

会議以外の時間帯で、ソーシャルプログラムも設定された。Centre for Developmental and Personality Psychology (ZEPP) や School Psychology Services of Basel (SPD) への訪問などプログラムに参加した。他の国の参加者らと歩きながら研究交流や文化交流を行った。

最後に

この度は申請者の国際会議の研究発表にかかる旅費の補助をいただき、大変有難うございます。申請者にとって国際学校心理学会大会参加は 4 回目となります。学校心理学に関わる最先端の講演などに参加できました。非常に貴重な経験です。このような機会を与えて下さったことを心より感謝申し上げます。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2019 年 8 月 16 日

(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 東京外国語大学大学院
総合国際学研究所 博士前期課程 1 年

氏 名 今井 真理



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	7th International Self-Determination Theory Conference 2019 2019 年 自己決定理論学会第 7 回国際大会
公式ホームページ URL	https://sdt2019.org
開 催 期 間	2019 年 5 月 21 日 ～ 2019 年 5 月 24 日
旅 行 期 間	2019 年 5 月 19 日 ～ 2019 年 5 月 27 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	The Netherlands, Egmond aan Zee, Hotel Zuiderduin オランダ, エグモント・アーン・ゼー, ザイダードゥイン・ホテル
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	今井 真理 東京外国語大学大学院 総合国際学研究所
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Promoting Intercultural Communication: Focusing on Attitudes toward Intercultural Communication and Motivation 異文化間コミュニケーションの促進: 異文化間コミュニケーションに対する態度と動機づけの観点から
補 助 金 額	68,000 円 (内訳 航空券代の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は, その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、7th International Self-Determination Theory Conference 2019 (SDT2019) の参加にあたり、貴学会の国際会議等参加旅費補助金を賜りまして、日本心理学会と関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。以下、SDT2019 への参加や発表による成果について報告いたします。

1. 学会の概要

2019 年 5 月 21 日から 5 月 24 日にオランダにて開催された、7th International Self-Determination Theory Conference 2019 に参加した。動機づけの自己決定理論に関する会議であり、心理学をはじめ、教育学や経済学、社会学の研究者が参加していた。本学会は、1999 年に最初に開催されて以来、3 年おきに開催されており、今回は 7 回目であり、750 名にものぼる研究者が約 40 カ国から参加した。オランダで開催されたため、ヨーロッパやアメリカからの参加者が多い印象を受けたが、日本からの参加者も複数見受けられた。

2. 発表内容（ポスター発表）

発表者は 5 月 21 日の 12 時から 14 時のポスターセッションにて、“Promoting Intercultural Communication: Focusing on Attitudes toward Intercultural Communication and Motivation” という題目でポスター発表を行った。この発表の中で、日本人英語学習者の英文の内容理解を促すためには、彼らの異文化に対する意識と動機づけの調整スタイルに注目した介入を行うことが効果的なのではないかという提案と、その主張を検証するための研究計画の提案を行った。研究計画の発表であったにもかかわらず、複数の研究者から研究デザインの改善提案やコメントをもらうことができ、大変意義深く貴重な経験であった。

3. 研究発表を聞いて

今までは英語教育に関する研究発表を聞くことが多かったが、スポーツや経済学の文脈で自己決定理論を活用した研究発表も聞くことができ、普段あまり触れることのない分野に自己決定理論を応用した研究に接するよい機会であった。また、聴講した研究発表の中には、図や動画の使い方など、今後自身が口頭発表を行う際の参考になるものがあった。

4. 大会全体を通して

海外で開催される国際学会に参加するのは今回が初めてであったため、その雰囲気を知るよい機会となった。また、研究発表だけでなく、懇親会やディナーなどの日本や欧米諸国の著名な研究者と交流する機会が豊富にあったため、関係性を築くと同時に異文化への理解も深めることができた。

本大会への参加により、自身の研究を多角的な視点から見直すことができただけでなく、国内外の研究者とのつながりを作ることができました。この貴重な経験を生かし、今後も研究活動に励んでいきたいと思います。この度は誠にありがとうございました。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2019 年 9 月 11 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 関西大学心理学研究科 博士後期課程
関西学院大学 文学部
氏 名 前田 由貴子



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	9 th World Congress of Behavioural & Cognitive Therapies 世界行動療法認知療法会議
公式ホームページ URL	http://wcbct2019.org/
開 催 期 間	2019 年 7 月 17 日 ～ 2019 年 7 月 20 日
旅 行 期 間	2019 年 7 月 16 日 ～ 2019 年 7 月 23 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Germany, Berlin, The CityCube Berlin ドイツ, ベルリン, シティキューブベルリン
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	前田由貴子 (関西大学 心理学研究科/関西学院大学 文学部) 佐藤寛 (関西学院大学 文学部)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Metacognitive Training for Students with High Autistic Tendencies in a Vocational College: A Preliminary Study 自閉スペクトラム症傾向が高い専門学校生への メタ認知トレーニングの予備的検討
補 助 金 額	68,000 円 (内訳 航空券代 153,880 の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、国際会議等参加費補助金の助成をいただき、9th World Congress of Behavioural & Cognitive Therapies へ参加し、ポスター発表を行いました。関係者のみなさまへ厚く御礼申し上げます。以下に発表概要と成果についてご報告いたします。

1. 学会概要

World Congress of Behavioural & Cognitive Therapies (WCBCT ; 世界行動療法認知療法会議) は、3年に1度開かれる行動療法・認知療法の国際学会である。領域は、うつ、不安、摂食障害、知的障害、発達障害、親子関係、PTSDなどに分かれている。今回は、世界85カ国から4000人を超える臨床家や研究者が集い、100近いworkshopやskills class、1000近いposter発表が行われた。報告者は、7月19日のposter sessionで、「Metacognitive Training for Students with High Autistic Tendencies in a Vocational College: A Preliminary Study」というタイトルで発表を行った。

2. 発表内容

発達障害の中でも、自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder: 以下ASD) 者はコミュニケーションの問題によって不適応になりやすく、支援介入が必要になる可能性が高い。本研究では、ASDの診断はついていないがASDの傾向が高いと判断される学生と、ASD傾向が低いと判断される学生に対して、コミュニケーションの問題を改善するための介入プログラムを実施し、その効果検討を行った。分析の結果、ASD傾向が高い学生のコミュニケーション能力、ASD傾向が低い学生のメタ認知が向上している可能性が示唆された。

この介入プログラムは、統合失調症者への介入プログラムであり、統合失調症者への有効性が確立されている。しかし、ASDには未だ有効性が示されていないため、プログラム実施上の工夫についての質問をいただいた。また、本研究の効果指標はすべて対象者自身による自己記入式の質問紙であるため、より客観性を高めるために、第三者からの評価を取り入れる必要性についてアドバイスをいただいた。特筆すべきは、介入プログラム開発者のSteffen Moritzから指摘をいただいたことである。今回はASD傾向が高い学生とASD傾向が低い学生を対象にしていたため、アナログ研究にとどまっているが、今後ASDの診断がつく学生を対象者として介入プログラムを行うことについて、励ましの言葉をいただいた。

3. 大会参加状況

well-being therapy と schema therapy についてのシンポジウムが印象に残った。well-being therapy では、うつの人への認知のゆがみに焦点が当てられており、うつの人がポジティブな出来事を不当に歪めて認知するのではなく、適切に認知することができるよう支援介入を行うことの重要性が示されていた。schema therapy では、クライアントのスキーマモードの状態を把握し、healthy control mode を育てていくこと、クライアントが行動を起こす前に何を考えており、どのような感情があるのか、その微かなサインを捉えることの重要性が示されていた。そして、このサインに気づきやすくするために、メディテーションを活用することが示されていた。

本大会への参加により、今後の自身の研究への示唆を得ることができただけでなく、研究活動への意欲を高める出会いを得ることができました。この経験を活かして研究活動に励んで参ります。改めて感謝申し上げます。

国際会議等参加旅費補助金報告書

年 月 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 甲南大学大学院人文科学研究科・学生

氏 名 今井田貴裕 ㊞

□

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The First Asian Hypnosis Congress 第 1 回アジア催眠学会
公式ホームページ URL	www.iran2019.com
開 催 期 間	2019 年 10 月 15 日 ～ 2019 年 10 月 18 日
旅 行 期 間	2019 年 10 月 9 日 ～ 2019 年 10 月 21 日 (学会主催企画参加)
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	No402, Razi Street, Razi Medical Building, Mashhad, Iran. イラン, マシュハド, ラジメディカルビル, ラジストリート 402
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	今井田貴裕 (甲南大学大学院人文科学研究科)・大浦真一 (甲南大学)・ 中谷知美 (甲南大学大学院人文科学研究科)・福井義一 (甲南大学)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Relationship between conscious and nonconscious attitudes towards hypnosis and impressions for hypnosis: Study using a paper-pencil version of Single-Target Implicit Association Test 催眠に対する意識的・非意識的態度と催眠に対するイメージとの関連 —紙筆版シングル・ターゲット潜在連合テストを用いた検討—
補 助 金 額	68000 円 (内訳 航空運賃 168,290 円の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、第1回アジア催眠学会の参加にあたり貴学会の国際会議等参加補助金の支援をいただいたことについて心より感謝申し上げます。以下に、大会概要と参加の成果についてご報告いたします。

【大会概要】

本大会は、アジア地域で初めて開かれた国際催眠学会の大会でした。アジアを中心に世界から催眠の臨床家や研究者が参加していましたが、日本からの参加者は報告者の所属する研究グループの4名のみでした。本大会は、イランのマシュハドにおいて10月15日から18日まで開催されました。研究発表は全て1000人規模の大ホールで行われました。

【参加による成果】

1. 発表について

申請者は、口頭発表のセッションで以下の内容を発表してきました。

発表タイトルは、Relationship between conscious and nonconscious attitudes towards hypnosis and impressions for hypnosis: Study using a paper-pencil version of Single-Target Implicit Association Test（催眠に対する意識的・非意識的態度と催眠に対するイメージとの関連—紙筆版シングル・ターゲット潜在連合テストを用いた検討—）であった。本研究は、大学生を対象に催眠に対する意識的態度を測定する催眠態度尺度（清水, 2009）と催眠に対する非意識的態度を測定するための紙筆版シングル・ターゲット潜在連合テスト（大浦他, 2018）、自由記述による催眠に対する印象について回答を求めた。催眠に対する意識的/非意識的態度と催眠に対する印象の相関分析の結果、催眠に対する意識的態度が肯定的であるほど、催眠に対する否定的な印象が減少したことや、催眠に対する非意識的な態度は催眠に対する印象と相関していなかったことが分かった。

プログラムの都合上、本発表に対するディスカッションの時間を十分に得ることができませんでした。しかし、大会後に本発表で使用された催眠シングル・ターゲット潜在連合テストについて多くの参加者が興味を持っていることを伺うことができました。

2. 大会のプログラムについて

本大会では、世界で行われている催眠研究や臨床適用について発表されていました。申請者は世界のこれらを聞いて、我が国の催眠研究が極めて下火な状況が続いていることを痛感しました。その中で申請者は催眠に対する理解を深め、刺激を受ける良い機会となりました。

また、学会期間中に臨床催眠の技法研修会が幾つか企画されていました。申請者も一部の技法研修会に参加することができました。しかし、申請者の英語力が不十分であるため、内容について理解が及ばない部分もありました。それでも、日本では知られていない臨床催眠の技法を知ることができました。

【謝辞】

本学会の参加により、世界の催眠研究を知り、我が国の催眠研究の状況を理解することができました。今回の経験を生かして自身の研究と臨床を行っていきたく思います。

この度は、貴学会からご支援をいただいたことについて改めてお礼申し上げます。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2019年 9月 4日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 名古屋大学大学院教育発達科学研究科
心理発達科学専攻
氏 名 田口 恵也



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The 13th biennial conference of the Asian Association of Social Psychology 第 13 回 アジア社会心理学会
公式ホームページ URL	https://taipei.asiansocialpsych.org/?src=nav
開 催 期 間	2019年 7月 11日 ～ 2019年 7月 13日
旅 行 期 間	2019年 7月 10日 ～ 2019年 7月 14日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Taiwan, Taipei, Academia Sinica (台湾・台北・中央研究院)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	田口 恵也 (名古屋大学大学院 教育発達科学研究科) 溝川 藍 (名古屋大学大学院 教育発達科学研究科)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	How do people evaluate altruistic lies, truth, and restraint on negative feedback? 利他的な嘘, 真実, 否定的なフィードバックはどのように評価されるのか?
補 助 金 額	38000 円 (内訳 航空券代および宿泊費の一部)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は, その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、The 13th biennial conference of the Asian Association of Social Psychology への参加にあたり、国際会議等参加旅費補助金の申請をご採択いただきましたこと、心より厚く御礼申し上げます。以下に、参加しました学会についてご報告いたします。

(1) 学会概要と参加状況

報告者が参加したアジア社会心理学会 (AASP) は、2年に1度開催される社会心理学に関する国際学会である。本大会は、2019年7月11日から7月13日までの間、台湾の中央研究院 (Academia Sinica) において開催された。本大会は、複数のシンポジウムや口頭発表が同時に行われるセッションとポスター発表のセッションに分かれており、ポスターセッションはランチの時間と並行して行われた。また、午前と午後に1度ずつ coffee break の時間、2日目の夜には conference dinner の時間が設けられていた。報告者は、ポスターセッションや口頭発表、シンポジウムに参加し、幅広い分野における最新の知見を得ることができた。さらに、coffee break や conference dinner において、国内外の研究者と積極的に議論を交わし、様々な分野の研究者と親交を深めることができた。

(2) 報告者の発表

大会2日目の7月12日にポスター発表を行った。発表題目は、“How do people evaluate altruistic lies, truth, and restraint on negative feedback? (邦訳：利他的な嘘、真実、否定的なフィードバックはどのように評価されるのか?)”であった。

人は、日常において常に真実を伝えているわけではなく、時として、相手を傷つけないために嘘をつくことや、あえて否定的な内容について言わないでおくことがある。本研究では、先行研究をもとに、他者の利益のためにつく嘘を「利他的な嘘」、他者との葛藤を回避するためにあえて何も言わないでおくことを「否定的フィードバックの抑制」と定義し、利他的な嘘、真実、否定的なフィードバックの抑制という3つの言動がどのように評価されているかについて検討を行った。本研究において、参加者は、それぞれの言動に関するシナリオをシナリオの登場人物とは全く関係のない第三者として読み、3つの言動に関する道徳性と許容度の評価を行った。その結果、利他的な嘘は、3つの言動の中で最も道徳性と許容度が高いと評価され、否定的フィードバックの抑制は、真実と同程度に道徳性、許容度が低いと評価されることが示された。

本学会のポスターセッションは、ランチタイムと並行して行われたにもかかわらず、報告者のポスター前には多くの学会参加者が集まり、様々な国の研究者たちと多彩な議論を展開することができた。それらの議論において、「他者のために嘘をつくこと」に対する価値観が文化によって大きく異なるのではないかと、あるいは、「否定的なフィードバックの抑制」という行動は日本特有のもので、海外では、本大会の発表とは異なる結果が示されるのではないかとといった意見が得られ、報告者の今後の研究を発展させるうえで重要な課題を見つけることができた。

以上のように、本学会に参加したことは報告者自身の研究について振り返ることのできた貴重な機会となりました。また、他者のために嘘をついたり、あえて真実を言わないでいたりすることが日本と海外において異なる捉えられ方をしている可能性があり、日本における嘘や欺瞞についての捉え方と海外におけるそれらに対する捉え方の違いに関してさらなる検討を行う必要があると再認識しました。

このような貴重な機会を与えていただいたこと、改めてここに御礼申し上げます。この経験を活かすべく、今後の研究活動に努めてまいります。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2019 年 8 月 18 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 神戸大学大学院人間発達環境学研究科
人間発達専攻 博士課程後期課程
氏 名 長田 真人



□
下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The International Society for the Study of Individual Difference 2019 conference 国際個人差学会 2019 年度大会
公式ホームページ URL	http://www.issidorgflorence2019.com/
開 催 期 間	2019 年 7 月 29 日 ～ 2019 年 8 月 2 日
旅 行 期 間	2019 年 7 月 27 日 ～ 2019 年 8 月 3 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Italy, Florence, University of Florence イタリア, フィレンツェ, フィレンツェ大学
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	長田真人 神戸大学大学院人間発達環境学研究科
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	The relationship between post-traumatic growth and personality in bullying victims いじめ被害者の PTG と性格の関係
補 助 金 額	68,000 円 (内訳 航空運賃 201,110 円の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、公益社団法人日本心理学会より国際会議等参加旅費補助金によるご支援をいただき、“The International Society for the Study of Individual Difference 2019 conference” 国際個人差学会 2019 年度大会への参加し、ポスター発表を行うことができました。本大会への参加に対し補助金をご支援いただきました日本心理学会及びその関係者の皆様に、誠に感謝しております。

以下に、本大会の概要と、大会での発表・活動状況についてご報告申し上げます。

1. 本大会について

国際個人差学会 2019 は、イタリアのフィレンツェ大学にて 7/29～8/2 にかけて開催された。個人差研究ということでパーソナリティ研究者が多い印象を受けたが、進化心理学に関係した生物・神経心理学、臨床心理学分野の研究者が参加されていた。シンポジウム会場や各パネルセッション会場、ポスター発表会場がまとまっており、初めての参加であったが親しみやすい雰囲気であった。

2. 発表について

発表は、大会 2 日目 7/30 の 17 時から 19 時に行われた。“Individual difference in social psychology” という分野において、No.51 “The relationship between post-traumatic growth and personality in bullying victims” (いじめ被害者の PTG(Post Traumatic Growth)と性格の関係)という題目でポスター発表を行った。発表内容は、日本の大学生におけるいじめの長期的影響における中核的信念によって媒介される性格特性と PTG の関連であり、結果から、他の外傷体験に見られる相関関係がいじめ被害者においても確認されたが、階層的重回帰では外向性/勤勉性と PTG の関係が中核的信念によって媒介されており、いじめとシングルイベントトラウマにおける PTG へのプロセスが報告された。2 時間の発表時間において、10 名ほどの参加者から意見を頂くことができた。特に、成果として何を設定しているかという質問が多く、国内での PTG 研究において、PTG を目的変数とする風潮との差異を強く感じた。また、いじめ体験に関する尺度についても質問を受けた。国内では研究ごとに尺度が異なる現状から、本研究において使用した尺度の妥当性を国内の研究間で確認するとともに、国際的な「いじめ尺度」との妥当性を考慮する必要があると考えた。最後に、性格特性といじめの影響の因果関係に関する質問を受けた。本研究は横断的研究であるため、性格特性といじめの影響については相関関係でしか扱っていない。一方で、中核的信念の変容に伴う外傷体験では、事例研究から性格特性が変化したと示唆する研究もあることから、縦断的な研究を実施する必要があることを議論し確認した。

3. その他学会での活動状況について

大会を通して、BIG5 をはじめとした中核的な性格特性についての議論に注目した。GFP(General Factor Personality; 一般パーソナリティ因子)については、主観的幸福感との相違について議論されていた。パーソナリティプロトタイプ理論における R(Resilients)型との差異も気になったが、高次因子としての構造に注目されていた。また、VIA-IS をはじめとした品格に関するシンポジウムにも参加し、BIG5 では説明できない主観的幸福感との関連が報告された。最後に、感情知能とアレキシサイミアに関するシンポジウムにおいては、異なる研究領域として研究されているが、その類似性は高いことが報告された。一方で、BIG5 と感情知能との関係は確認されるが、アレキシサイミアとの関係は一定しないことが報告された。

本学会への参加を通して、国内との研究の主流や傾向の違いを意識させられた。特に、過程だけではなく成果をはっきりさせることは、PTG 研究においても注視されており、いじめ防止について考察する際には欠かせない視点であると感じた。また、英語における語彙能力不足も痛感したが、それ以上に、休憩時や通行時に誰構わず軽く声掛けする習慣への適応が難しく、苦労した。

最後になりますが、国際会議等参加旅費補助金によるご支援により、このような貴重な体験をさせていただきました。この経験を、今後の研究に活かしていけるように、尽力してまいります。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2019 年 7 月 20 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 東京大学大学院人文社会系研究科 修士課程

氏 名 ターン有加里ジェシカ



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	13th Biennial Asian Association of Social Psychology and Summer School 第 13 回アジア社会心理学会およびサマースクール
公式ホームページ URL	https://taipei.asiansocialpsych.org/ https://taipei.asiansocialpsych.org/summer%20school
開 催 期 間	2019 年 7 月 7 日 ～ 2019 年 7 月 13 日
旅 行 期 間	2019 年 7 月 6 日 ～ 2019 年 7 月 15 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Taiwan・Taipei・Academia Sinica 台湾・台北・中央研究院
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	ターン有加里ジェシカ (東京大学)、橋本剛明 (東京大学)、 白岩祐子 (東京大学)、唐沢かおり (東京大学)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	“Take one for the team!” The positive and negative effects of justice sensitivity in a volunteer’s dilemma in workplace scenarios ボランティアのジレンマにおける公正感受性の正の効果と負の効果 ——職場シナリオを用いた検討——
補 助 金 額	38,000 円 (内訳 航空券代の一部)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、国際会議等参加旅費補助金制度に採択していただき、国際会議およびその付属のサマースクールへの参加の機会をいただいたことに対して、関係者の皆さまに厚く御礼申し上げます。活動内容およびその成果についてご報告させていただきます。

【活動内容】

台北の中央研究院で開催されたアジア社会心理学会主催のサマースクール(2019年7月7日～10日)、および国際会議(2019年7月11日～13日)に参加した。サマースクールでは、国際的に活躍する研究者らによるレクチャーを受け、社会心理学の位置づけや可能性、新たな研究手法、研究者として必要な姿勢などを教わった。また、様々な国から来た学生と共にディスカッションを通じて研究計画を練り上げた。国際会議では7月12日のポスターセッションにおいて「**“Take one for the team!” The positive and negative effects of justice sensitivity in a volunteer’s dilemma in workplace scenarios**」というタイトルで発表を行った。自身の発表時間以外では様々なテーマの発表を聞き、他の研究者との意見交換を行った。

【成果】

サマースクールでの成果は、第1に、レクチャーを通して改めて社会心理学を専攻する者としてどのような貢献を世の中にできるか考える機会を得たことである。ここでの学びは今後私自身が研究を遂行する上で常に心得ておきたいものであった。第2の成果は、様々な国——中国本土や澳門、台湾、フィリピン、インドネシア、オーストラリア、イギリスなど——から来た学生との出会いである。彼ら・彼女らとはサマースクール期間中に様々な内容について話すことができた。バックグラウンドが異なる彼ら・彼女らとの会話は刺激的で、新たな気づきが多かった。また、少人数のグループで研究計画を練り上げる過程では、研究に対する姿勢・考えの違いなどから上手く進まないこともある一方で、それぞれが持っているアイデアを結集させて計画をブラッシュアップしていく過程では国際的な共同研究の楽しさを知った。

国際会議での成果は、第1に、自身の研究を発表したことで様々な研究者から予想外の意見をいただいたことである。自身の研究の新たな見方を指摘していただいたり、文化差の可能性を考える必要性を指摘していただいたりする中で、今後の研究の方針を考え直すことができ、有意義な時間を過ごした。第2の成果は、様々な国から来た研究者の発表を聞くことを通じて、日本の外にも目を向けるべき問題が山積していることに改めて気づいたことである。日本国内に留まらずに広い視野を持って研究に取り組むことの重要性を感じた。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2020 年 月 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 甲南大学大学院人文科学研究科・学生

氏 名 中谷 智美 ㊞

□

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The 1 st Asian Hypnosis Congress 第 1 回アジア催眠学会
公式ホームページ URL	http://cong-asianhypnosis2019.mums.ac.ir/en/
開 催 期 間	2019 年 10 月 15 日 ～ 2019 年 10 月 18 日
旅 行 期 間	2019 年 10 月 9 日 ～ 2019 年 10 月 21 日 (学会主催企画参加)
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	No402, Razi Street, Razi Medical Building, Mashhad, Iran. イラン, マシュハド, ラジメディカルビル, ラジストリート 402
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	中谷智美 (甲南大学大学院人文科学研究科)・大浦真一 (東海学院大学)・ 今井田貴裕 (甲南大学大学院人文科学研究科)・福井義一 (甲南大学)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	The relation between Childhood Abuse, Altered States of Consciousness and Hypnotizability. 子ども時代の被虐待体験と変性意識状態、催眠感受性の関連
補 助 金 額	6 万 8 千円 (内訳 航空運賃 168,290 円)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、“The 1st Asian Hypnosis Congress（第1回アジア催眠学会）”への参加にあたり、国際会議等参加旅費補助金への申請を採択していただき、誠にありがとうございました。

以下に、当該学会の概要、自身の発表の成果、および活動内容についてご報告いたします。

【大会の概要】

本大会は、アジア催眠学会の記念すべき第1回大会であり、世界中から催眠の専門家が集った。参加者は、現地からは約1000人、現地外からは約500人であった。日本からの参加者は申請者の所属する研究チームの4人のみであった。本大会は、イランのマシュハドにおいて10月15日から18日までの間開催された。発表は全て1000人規模の大ホールで行われ、それぞれの発表時間には質疑応答の時間が含まれていた。

【発表概要】

申請者は、現地時間で10月17日12時45分～13時に口頭発表を行った。発表題目は、“The relation between Childhood Abuse, Altered States of Consciousness and Hypnotizability.”（子ども時代の被虐待体験と変性意識状態、催眠感受性の関連）であった。本発表の内容を以下に示した。

子ども時代の虐待経験と催眠感受性は、関連が強いという報告と関連がないという報告が存在する。また、催眠状態は変性意識状態（Altered States of Consciousness: ASC）の一種であるとされている。高い催眠感受性を持っている人は深い催眠状態に入ることができることから、高い催眠感受性を持っている人は深い変性意識状態に入ることができると考えられる。虐待経験と催眠感受性との関連が一貫していないのは、ASCに入りやすい群とそうでない群があることが関係していると考えられる。ASCに入りやすい群は、虐待経験が催眠感受性に及ぼす影響が強くなり、ASCに入りにくい群では影響がないと考えられる。したがって、虐待経験が催眠感受性に及ぼす影響におけるASCの調整効果を検討した。しかし、虐待経験とASCへの入りやすさは、催眠感受性と関連はなかったことが示唆された。

英語での口頭発表、大人数の参加者の前での研究発表をすることが初めてで、非常に緊張したことを覚えている。持ち時間内には発表を終えることができたが、その場で質問が出なかったため、参加者と議論をすることはできなかった。

【成果】

口頭発表を通して

今回、アジア催眠学会にて口頭発表をすることで、日本における研究結果を他国に向けて報告することができた。日本では催眠研究があまりされておらず、日本における知見を世界に対し発信する機会が少ないため、わずかではあるが、日本における知見を発信できたことは一つの成果である。

シンポジウム等への参加を通して

10月15日から18日までの全日程で本大会に参加し、世界で利用されている催眠の技術や催眠の利用のされ方など、実験室で行われているような研究だけでなく、臨床適用技術まで、知見を広げることができた。

【謝辞】

本大会に参加することで、自身の研究成果を発信することができました。さらに、日本の先を行く海外の催眠研究を知ることができました。今後、有用な催眠を日本でも広めていくために、今後も精進していきます。このような貴重な体験をする機会を与えてくださったこと、深謝いたします。